

会 報

72号



函館の歴史的風土を守る会会報

No.72 H14. 12. 20

発行所 函館の歴史的風土を守る会

事務局 函館市五稜郭町43-9

五稜郭タワー株式会社内

電話(0138) 51-4785

印刷所 (有)三和印刷 電話 45-0845

開港5都市景観まちづくり会議 函館大会が開催されました。

2002. 10. 18/19/20



開港5都市景観まちづくり会議 函館大会を終えて

大会実行委員長 浜 島 国四郎

平成5年から始まったこの大会も、数えて第9回目を迎え、函館大会は平成8年の第4回大会以来の第2回目です。前回を上回る大会にしたいと緊張しましたが、幸いにも函館市の市政施行80周年の記念行事開催初日（10月18日）の全体会議は、社団法人日本建築美術工芸協会（a a c a）の第14回2002函館 a a c a 景観シンポジウム「港町函館の景観～港とひかり」と共催となり、盛大な幕明けとなりました。

夕刻からは五島軒へ会場を移し、開港5都市参加団体の紹介、引き続いてのウェルカムパーティでは、各都市ご自慢の特産商品を持ち込んでの交流とクイズに、参加各都市のパフォーマンスが飛び出し沸き返りました。

翌19日の分科会は、まさに開港都市にふさわしい北前航路、石川啄木等々「巴の港」函館の歴史的風土を紹介することができ、北国からのメッセージ・いいべや「港・まち並み」を全国の皆さんにアピールできましたことは、実行委員長として終生忘れ得ぬ大会となり、この上なき幸せでございました。

来年は節目の第10回大会となりますが、大会アピールにもご協力するように、5つの都市が熱い言葉で語り合い、歴史的風土を学び、互いに知らせ合い、新しい海洋国日本の隆盛を信じ、新たな行動を起こす決意を固め、次の大会に参加することを誓い合いたいと思います。

最後になりましたが、この大会の大成功の陰で、実行委員会に名を連ねていただきました各団体、そして事務局の皆様方の不断のご努力に対しまして、心からお礼を申し上げ大会の終了報告とさせていただきます。

(2002. 10. 20)

開港5都市景観まちづくり会議函館大会は、平成8年に「北の開港都市に民の系譜をさぐる」をテーマにして開催されて以来、今年が2回目の開催になりました。第1日目（10月18日）は、函館a a c a景観シンポジウムに参加、夕刻からは五島軒本店を会場に、各都市活動報告、参加団体の紹介があり、その後のウエルカムパーティで交流、懇親を深めました。第2日目（10月19日）は、3分科会がもたれました。第3日目（10月20日）は、大会最終日で、3分科会の報告、大会宣言、次年度開催地となる「横浜」に大会シンボル旗が渡され、熱い思いを共有し合い楽しく有意義な大会であったことをみんなで確認しました。（表紙写真は20日の全体会議です）。

なお、分科会は、第1分科会－北前航路と函館、第2分科会－函館を愛した芸術家たち、第3分科会－自然と都市防災。れきふう会員はそれぞれの分科会に分かれて参加しました。ご苦労様でした。その様子を、次頁からの報告や感想文等によってお知らせいたします。

以下のように編集部で参考資料をつくりました。

▶開港都市景観まちづくり会議とは、（同会規約より）
目的－第2条 景観まちづくり会議は、安政5年に開港港に指定された函館、新潟、横浜、神戸及び長崎の5都市（以下「開港5都市」という）の市民が、景観、歴史、文化、環境などを大切に守り、愛着をもってそだて、個性豊かで魅力あるまちづくりを行うため、相互に交流を深め、課題を協議し、開港5都市のまちづくりの推進に資することを目的とする。

▶開港5都市景観まちづくり会議の開催経過

1993年（平成5年8月）	第1回	神戸大会
市民主導のまちなみ・まちづくり		
1994年（平成6年10月）	第2回	長崎大会
市民主導のまちなみ・まちづくり		
1996年（平成8年2月）	第3回	新潟大会
港といっしょになった都市、		
一体となった都市って何だろう		
1996年（平成8年10月）	第4回	函館大会
北の開港都市に民の系譜をさぐる		

1997年（平成9年10月）	第5回	横浜大会
市民主導のまちなみ・まちづくり		
1998年（平成10年中断）		神戸大会代表者会議
1999年（平成11年10月）	第6回	神戸大会
開港都市の未来（あした）を探る		
2000年（平成12年10月）	第7回	長崎大会
開港都市の遺伝子を伝える		
2001年（平成13年8月）	第8回	新潟大会
水都（みなと）にいがた夏!! ようこそ		
2002年（平成14年10月）	第9回	函館大会
北国からのメッセージ		
いいべや「港・まち並み」考えよう		

▶開港とは、

開港（かいこう）と言えば、江戸幕府がキリスト教の禁制と、貿易の統制・管理と日本人の海外往来の禁止を企図して実施してきた「鎖国」を解いた1958年の『安政開国』のことと思っている人が多い。

「日本において常時外国貿易のために開かれている港を『開港』（空港の場合は税関空港）と呼んでおり、関税法では現在、京浜港、神戸港、大阪港、名古屋港など120海港が開港として指定され、成田空港など22の空港が『税関空港』として指定されている。」《大百科事典から》

函館の場合、函館港はもちろん『開港』であり、同時に函館空港も『税関空港』として指定され、加えて全国に9ヶ所しかない『統括税関』があり、更に加えて津軽海峡は、日本に5海峡しかない『国際海峡』を控え、まさに全国唯一の日本を代表する『開港都市』と言えます。

▶大会シンボルマークとは、

大会旗のサイズはタテ1.4m、ヨコ2.1m。5つの帆、5港の帆が景観まちづくりの風を受けて、いっぱい広げているデザイン。5色の緑は自然・生物を表し、ピンクは愛と友情、青は海、空、黄色はコミュニケーションを表す。紫は文化のイメージ、5色のどの色がどの都市をあらわすかはご自由に、どれでもよい。

（1頁写真上の壇上右端の前新潟大会実行委員長 小柳行弘氏の全体会議最終日の話を聞いて－編集子）

※大会シンボルマークのカラーコピーをご希望の方は、

☎52-8646（きよの）までご連絡下さい。原本をお貸しします。素敵なデザインです、おそば近くにおいて楽しんで下さい。

開港5都市景観まちづくり会議函館大会・会員の参加記

「パネルディスカッションを聞いて」

景観とは外観ではなく内観である－會田雄亮氏（陶芸家）の言葉

運営委員 清水 源 基

歴史学者、照明デザイナー、陶芸家、そして建築家、アドバイザーは知己の奥平先生。

なるほど「景観」と言っても、各界の専門家の立場からみれば、各かような見方があったのかと大変勉強になりました。

そして私が一番うれしかったのは「観光」という言葉が、どなたの話からも出ず、標題も素直に「港町・函館」だったことでした。

そして特に胸に響いた言葉は、陶芸家の會田雄亮さんの「景観とは外観ではなく内観である。」「ウォーターフロントがアミューズメントに溺れている」という言葉と、照明デザイナー石井幹子さんの岐阜県白川郷をスクリーンに映し出しながらの「照明の原点は【月明かり】です。」の言葉でした。

つねづね私は「観光」という言葉に疑問を感じていました。辞書を引くと「よその土地の風光・風俗などを見物して楽しむこと」とあり、「観光都市とは自然美に富み、名所旧跡に富むため、観光客が大勢集まりそれに依存して発達した都市。京都・奈良・鎌倉など」と書いてあります。それが何時の間にか「観光行政に力を入れ、観光産業を興し、観光都市を目指します」

となり、まったく函館市の発展の原点が何処にあるのか方向を見失い、「観光」という言葉が意味不明のまま一人歩きして「アミューズメント」に溺れた結果、人口も経済も財政力もずるずると後退してしまいました。

景観とは、港を忘れ飾りたてたウォーターフロント、厚化粧の外観ではなく、内に秘めた素顔（内観）の美しさ、明治・大正そして昭和から平和へ、長い歴史的風土の中で培われてきた「自然と環境」を引き出すこと、まさに【月明かり】に照らし出された【港町・函館】であり、そこに町づくりの原点があることを教えられました。



景観まちづくり会議 雑感

開港5都市景観まちづくり会議函館大会が開催されましたが、その10月18日14時から芸術ホールにて第14回2002函館 a a c a 景観シンポジウムが市政施行80周年記念事業として行なわれた。（港とひかり）そして（物語はいつも港で生まれる）とのサブタイトルのもと、建築家、美術家、工芸家、照明デザイナーのパネリスト達の意見を聞くことが出来ました。

入場の折りに所属団体は、と聞かれ「歴史的風土を守る会」と云ったが、受付担当者は何回も聞きかえすので、主催団体の中より所属している名を告げて入場することができた。歴風会の名称もわからない市の受付担当員達の態度には、いささかあきれました。

アドバイザーの奥平忠志先生より歴風会の成り立ち

歴風会会員 佐藤 利 男

や存在感についての意義深いお話しがあって、気を良くして、このシンポジウムを見聞する事が出来ました。日本のと云うよりも世界的に有名な各パネリスト達の興味深いお話しも、ディスカッションにならずに一方的に終わってしまい、心残りのシンポジウムでした。観光の資源として利用されている各施設ですが、先人達の労苦に思いを馳せ、「温故知新」の精神にて、この歴史的な文化遺産を、官民一体のもと、文化都市函館を目指したいものです。明日から開催される開港5都市景観まちづくり会議に於いて函館の長所、短所を晒け出し、良き方向性を示して欲しいものと期待しながら帰路につきました。

ウエルカムパーティ参加の感想

お恥ずかしい話ですが、18日午後1時受付を終り、全体会議が始まって「全体会議1」が、a a c aと言う団体の「第14回2002函館景観シンポジウム」だと言うことを知りませんでした。

「全体会議1」が終わって、それ！ウエルカムパーティだ！と思ったら「全体会議2」って何？しかも30分？と思っている内に終わってしまい、マーマー食事前のご挨拶は短いほどよろしいと大歓迎でした。そして・・・

1、まさに「合コン！」

日本人のパーティ下手は諸外国でも有名です。ナント無く人見知りする。変に気取っちゃって会話が始まらない。

と思っていたら、これぞ開港都市の歴史的風土でしょうか、まさに「合コン」アッと言う間の大騒ぎ「全体会議2」を補って余りある、各都市の自己紹介

パフォーマンスにすっかり会場は打ち解けてしまいました。

2、さすが「地酒の本場」

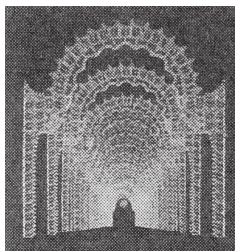
新潟と言えば「地酒」、かつて「越の寒梅」ブームを巻き起こした地酒の本場、早速特設テーブルへ行き（その後何度も往復）すっかり開港・貿易最前となり、何はなくとも次回の新潟大会だけは参加をと心に決めました。

3、参加者はミーンナ異国情緒いっぱい！

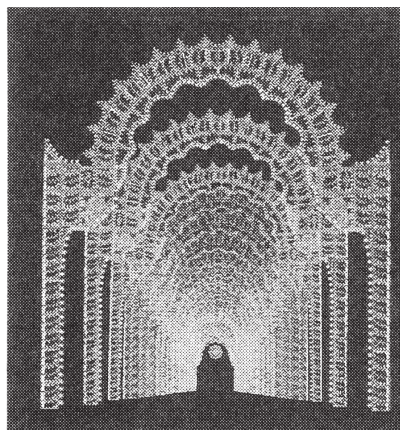
不思議なものです、パーティの雰囲気は異国情緒いっぱい、特に私のテーブルは、神戸の南京町の皆さんだったので、テーブル料理には箸が進まず、中華料理特に豚マン、シュウマイの「話」でお腹は満杯、神戸ルミナリエの話でパーティは輝いていました。

（清水 源基）

神戸ルミナリエ



1995年1月17日神戸は大震災に見舞われ、物心両面で落ち込んでいる「人と街を元気づける」ために、【光と彫刻・ルミナリエ】が誕生しました。



Art Director : Valerio Festi
《ヴァレリオ フェスティ》
イタリア生まれ

Producer : 今岡 寛和

神戸元町から三宮界隈を彩る
毎年12月クリスマスが最終日



神戸の歴史的風土の一つに電飾文化があるように思います。元町からの夜の風景に、裏山の斜面を飾る《神戸市章と錨》。これも又開港都市神戸を彩る景観だと思います。函館山からの夜景もさることながら、港から見える函館山斜面に《函館市章とすずらんの花》などはいかがでしょう。

分科会に参加して

第1分科会・テーマ「北前航路と函館」に出席した。一ヶ月前に参加した全国町並みゼミの分科会で、教授に率いられた学生がパソコンを駆使し、さながら大学ゼミの研究発表の様相であったことが甦り、今、その継続として情報を受けているのではないかと一瞬錯覚した。

テーマが変わり、函館の景観、街づくり、観光のあり方の事例討議になった。開港各都市の活動家が鋭い視線で捕らえた函館についての指摘は的確であり、今後の町づくりにとって極めて有意義であった。しかし、他都市における活動、特に開港地の歴史性を市民意識の中にどう働きかけるか。関係官庁との連係、特に国土交通省や文化庁との関わり方などについての意見交流が無く終了したことは心残りであった。

全体会②や懇親会で、各地の「相変わらぬ元気な仲間」に会い、歴風会が「更に頑張る力」を与えられたことに深く感謝し、開催に至るまで努力して頂いた函館市都市建設部都市デザイン課の皆様には心よりお礼を申し上げます。（清野 恒夫）

私は2日目(19日)の分科会が一番印象に残りました。希望したテーマから外され第2分科会、テーマ「函館を愛した文人たち」のA班「文学舞台（景観）としての函館」に配置されました。

最初の印象は、こんな漠としたテーマで議論になるのかと心配もしたところです。

もちろん、話が出来ないならテーマは無視して良いとのコーディネーターの助言もあったりで、始めたのですが。

案の定、沈黙。班の纏め役、発表者決定に手間取り、結局私がその場の纏めの発表役となってしまう、「海は創造性を育む、三方を海に囲まれた函館はそんな意味で創作や思索に適した場では？」と話を切り出す。

そうすると多くの人が発言してくれ、

「石川啄木は僅か4ヶ月しか函館に住んでなかったのに、こんなに函館の人が入れ込んでいる、不思議」

「自然の中で、ピュアな環境の中で多くの詩が生まれたのかな」

「とにかく立待岬に行くと本州が見え、津軽海峡、日

本海、太平洋が全て見渡せるような気になる。これが自然に溶け込むと言うことなのか」……等活発な意見が出された。

また、最終日の全体会での第1分科会「函館を事例にしながら景観、街作り、観光のあり方」などを討議した内容の報告は、これからの函館づくりに多くの示唆を与えてくれたように思い、改めて、地元ばかりでなく各地から来た、多様な物の見方をしてくれる方々との出会いが大切と実感しました。（石井 満）

私は第2分科会に所属した。テーマは函館を愛した文人たちということであった。

しかし、自分は、函館が舞台となっている小説等をほとんど読んでいないので、初めから議論への参加は無理であった。

あとで、桜井氏から聞いたら、全国的に見て函館の地名が出てくる小説類は一番多いとの事。本当かなと思いつつも、これは今迄知らなかった事であり、この事を知っただけでも実りがあったと思う。

これから少しずつでも函館が出ている本を読まなければというのが最大の感想である。（上谷 俊夫）

第3分科会報告 テーマ「自然と都市防災」

5都市から、開港後様々な災害をくぐり抜けながら、街が復興してきた歴史が報告されました。函館は大火、新潟は水害、横浜は関東大震災と戦火、神戸は阪神淡路大震災、長崎は台風と水害でした。

これらの災害には、都市計画や復興計画にハード面の防災計画が組み込まれていきます。道路幅員の拡大による防火帯の設置、分水路、公園のオープンスペース、建物の耐震・耐火の強化等でした。神戸旧居留地の復興への取り組みの早さ、長崎の被害の小ささは日頃のコミュニケーションの深さや互助的習慣によって可能だったとの報告に、防災を抑制するソフト面を見ることが出来ました。

人口増から減少に向かう21世紀には、市街地再開発事業は望めなく、今ある街の資源を大切に改善・更新していくことが、新しい都市社会の構築の必要性であ

るものと考えます。

学校施設・公共施設の防災拠点化・日常的な街づくり活動への参加・専門家による安全な街に対する勉強など、地域特性にあった仕組みづくりに取り組むことが討議・提案されました。（山内 一男）

神戸市の居留地防災活動

（居留地連絡協議会の組織と活動）

◎環境委員会

- 1、緑化活動（ガーデニング教室等）
- 2、クリーン作戦（ポイ捨て防止運動等）
- 3、アイドリングストップ運動（街頭キャンペーン等）

◎親睦委員会

- 1、ウォークラリー・ゴルフ・マージャン・ボーリング・忘年会等

◎まちづくり推進委員会

- 1、広告物ガイドライン作成
- 2、パーキングメーターの整理・撤去
- 3、プロムナードコンサート

◎防災委員会

- 1、消防大会参加
- 2、防災講演会参加
- 3、救命士講習会開催

◎広報委員会

- 1、広報誌発行（年1回）

大会宣言文を読んで「景観会議」とこれからの西部地区

副会長 若 山 直

大会宣言文

環境、経済をはじめとして人々の生き方にもグローバル化あるいはボーダレス化の高波が押し寄せてきている現在、海洋国日本の港町の活力がいまや遠く、他国へ去ろうとしている。

海外の諸文化とも融合しつつ、再度、独創的發展を望む我々に港町は、歴史的な開港によって成り立ってきた5つの都市の知恵と協働により自立的かつ個性のある町づくりを推進する大きな力を得たことを確信する。

第9回大会において「聞いて、知って、語ってそして学んだ」ことを実践し、後世へと引き継ぐ魅力ある美しい景観都市を形成するため互いに努力していくことを確認しここに宣言する。

再び会することを約して

2002年10月20日

開港5都市景観まちづくり会議函館大会

私は「歴風会」会員だが「伝統的建造物保存会」会員でもあり、「協同組合十字街商盛会」会員でもあるので、「開港5都市景観まちづくり会議函館大会」への登録は、理事長をつとめる「十字街」にせざるをえなかった。最終日の20日は、大会宣言文を朗読した後、急ぎ分庁舎市民見学会に駆けつけた。ご存じのとおり、水道局は分庁舎を引き払って新ビル「アクロス十字街」に入居したが、移った後の分庁舎をどう使うかは議論のあるところである。分庁舎が十字街の商店街に位置することから、商盛会では住民の意見をまとめるためのフォーラム、見学会などを開催してきたが、歴風会も、かつての借り上げ住宅問題の反省を踏まえて早めに意見をまとめたものだ。

9月25日、私が経営する五島軒は隣家（空き家）からの出火により類焼したが、西部地区には同様の空き家が実に多い。歴史的な建造物の保護のためにも、空き家対策は急務だと痛感した。どんなに自分の住む建物の防災が完璧でも、隣家からの類焼はおこりうるか

らである。

今回の火事では、多くの会員の皆様にお見舞いや激励のことばをいただきました。紙上をかりて心より深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。

開港5都市景観まちづくり会議函館大会

大会アピール

開港以来148年間、巴型の懷に抱かれた歴史のひだを刻んできた港町函館

日本海と太平洋をつなぐ津軽海峡を越え
北国からのメッセージ いいべや「港・まち並み」考えよう
を基本テーマとして、5つの都市が熱い言葉で語り合い
歴史の内容とその価値を学び互いに知らせ合い、
共に学び決意を固めあうためここに集まりました。

14年度神山茂賞を受賞して

副会長 落 合 文 彦

去る11月7日、はからずも「神山茂賞」を受賞した。この賞は、小学校教師の傍ら、終世郷土史の研究生活を送った故神山茂氏の業績を讃え、後進を励ますために設置されたもので、平成元年函館文化会が制定し、現在までに12個人と2団体、6件の奨励賞が授与されている。私は微力ながら40年来の上磯地方史研究会の取り組みや戦争と平和関連の資料収集、平成5年から始めた上磯珍らし珍らし展の開催などが授賞の理由となった。改めて神山氏の意図を汲み、責任の重さを実感している。私の仕事の内容については、れきふうの次号に申し述べたいと考えている。

落合文彦氏神山茂賞受賞祝を
12月21日（土）18：00～
五島軒駅前店で開催

文化講演会の開催

運営委員 千 葉 敬

11月16日、午後1時30分からサンリフレに於いて、「函館文学散歩」のテーマによる文化講演会を開いた。講師の西堀滋樹氏は同人誌「路上」編集発行人である。

約30名の参加者があり、西堀講師が自分で歩いて写した風景や建物を、パソコンを操作しながらスクリーン上に映し出し講演した。

古くは長谷川海太郎・四郎兄弟、久生十蘭、亀井勝一郎、現代では佐藤泰志、辻仁成など函館にゆかりの作家たちの作品の背景や地域性に着目しつつ、その育んだ景色、場所について、多岐にわたる豊富な知識により約2時間にわたり、函館を舞台とする文学作品を紹介し、熱弁をふるった。



（演者 西堀氏）

第25回全国町並みゼミ・鞆の浦大会に参加して

会長 清野 恒夫

全国町並み保存連盟主催第25回全国町並みゼミ鞆の浦大会が、9月20日（金）から3日間、広島県福山市の県民文化センターふくやま及び鞆町各所で開催された。

鞆の浦は福山市街よりバスで約30分、瀬戸内海を前景に江戸時代の家並みや寺院が残る小さな漁村、鞆町内の湾であるがその歴史は古い。潮待ち（潮流の変化）の良港として、平安時代は都から海路九州に赴く官僚の出港地であり、江戸時代は朝鮮通信使の寄港地など海上交通の要所として栄えた。昭和50年代後半、県・市による港湾整備計画が発表され「鞆港架橋・埋立」が浮上した。鞆町の人々は「鞆の自然と環境を守る会」など4団体を立ち上げ、常夜燈や雁木などの港湾遺産及び鞆の浦全域の保存運動を展開させた。現在、鞆架橋国庫補助金は見送られ鞆港埋立は延期されている。住民は世界遺産登録を目指して活動している。今時、開催した全国町並みゼミや住民と共に行ったワークショップが鞆の浦保存運動の支援になればと願っている。

第7分科会・特別分科会「20世紀から21世紀の町並み保存運動への提言」（連盟顧問石川忠臣氏の提言要約）

『行政は当初の厄介物扱いから重要な行政手法へと変化させ、町並み首長すら出現した。住民は地域の特

性を掘り起こし“故郷の誇り”を認識した。地方建築家は「創造と再生の二方向」論の実現化のため地域の古民家再生や町並みづくりの核として変容した。学者や専門家は町並み関連法規の新設など運動の加速化に役割を果たした。

しかし、一方では、一部であるが町づくりブームに乗った都市計画家や町並みを都市計画の一手法として隷属化する専門家を排出させた。また、権威的で学会に固執する学者、理論には強いが日常活動に弱く住民運動から撤退する学者も出てきた。

21世紀の町づくりとは「住民主体論」の確立を図ることである。住民は町づくり理論に対する自覚と誇りと意思の創出を図ることであり、運動体は『町並み憲章』の再評価を出発点として、学者・専門家・行政・一般市民・企業との新しい交流と関係を構築することである。「町並みが人を育て、人が町並みを育てる」という当たり前のことに自信を持って「町並みは住民のもの」という「住民主体論」を完結させて行かなければならない。』

歴風会も地域団体幹事なので幹事会に出席した。会では73地域団体の加盟を確認し、NPO法人化を図ること、次年度は奈良県今井町での開催などを決定した。

*** 編集後記 ***

景観まちづくり函館大会の3日間は意義深いものであった。5都市がそれぞれに異なった開港受入れの経緯をもちながら、“外国人の居留地”があり、戦争や震災、水害、大火と大きな災害に遭遇している。開港時の資源、資産の多くを失いつつも、新しいまちづくりに取り組む状況には、本当に参加してよかったと思った。とくに、最終日程の全体会は説得力のある内容で、その上隣に坐った新潟の方から、美しいチューリップの絵葉書を頂き、暖かいものを感じた。絵葉書は入院中の田尻副会長にさしあげた。多くの提言を聞きながら、函館の新島裏碑の周辺をどう説明すればよいか迷ってしまった。本大会を始め、黒船来航フォーラム、東北・北海道地方史ゼミなどの学習機会に恵まれた年度後半であった。

72号はれきふう会員のご寄稿によって出来ました。また、運営委員の佐々木、清水さんが助っ人してくれ、写真は太田孝雄、清水さん、都市デザイン課山口さんの協力がありました。ありがとうございました。（きよの）

